

桜の聖母短期大学で日本語検定を全員受検

— 就業力育成のために日本語力を —



桜の聖母短期大学
取材記事

ライター 上村 雅代



桜の聖母学院は、コングレガシオン・ド・ノートルダム修道会に源をもつ、カトリック系の学校です。幼・小・中・高・短期大学、生涯学習センターを備えた総合学院で、福島県福島市の地域に根ざし、「愛」と「奉仕」に生きる多くの社会人を輩出しています。

同校の短期大学である「桜の聖母短期大学」のリメディアル教育センター長の加藤竜哉教授にお話を伺いました。

桜の聖母短期大学では、全学生が1年次の6月に日本語検定4級を受検します。

「検定を受けることで、意識が変わります」と先生。日本語は読む力・書く力・考える力の土台。英語を学ぶ上でも、ベースとなる日本語が大事だとおっしゃいます。

学科を超えた共通教育に重みをおく同校では、1年次の必修科目の中で、日本語検定を意識した日本語教育を行っています。

必修科目のひとつ「ベーシックスキルズ」では、レポート作成について学習。同じく必修科目の「キャリアデザインA」では、「日本語を知る」、「敬語コミュニケーション」、「漢字の面白さ」、「模擬テスト」等の日本語検定試験対策も含めて学びます。

キャリア教養学科の「キャリアマネジメント」でも、例えば、レポートの帰結が「～したいと思う」で締めくくられていた場合には、なぜ断定を避ける言い回しになったのか、自らの「気持ち」の源流に遡り、理由を考えるよう指導します。臨床心理士やキャリアカウンセラーの教員が担当する授業なので、何故そのシチュエーションで尊敬語や謙譲語を使うのかを、言葉の根底に流れる「気持ち」を含めてグループディスカッションなどを行い、形式としてではない、言葉の本質を学びます。

「日本語という礎の上に、我々のマナーが乗っているのです」

日本語力を全ての学びの礎石と捉え、徹底的に日本語力を伸ばす桜の聖母短期大学の教育効果は、4級にとどまらず日本語検定準1級、2級、3級の合格者数を見ても明らかです。

授業後に書かせる「振り返りシート」にも、変化は現れます。入学当初にはほんの数行だった文章が、10分程度でA5用紙にびっしり書けるようになり、内容や論理展開も変わってくる、と先生。

それらの劇的な教育効果は、先生方のきめ細かいご指導の賜物のようです。多くの授業の終わりに、「振り返り」を書かせ、その場で回収。担当教員は翌週必ず添削の上、返却。漢字、送り仮名のミスは赤ペンで直し、教員によっては花まる、スタンプ、絵などを付けるのだそうです。

次ページへ続く 



また、同校は「振り返り」を通して学生と教員との双方向の関係を大切にしている上、「顧問制度」を導入。十数人に1人ずつ、顧問となる教員が割当てられ、学生をバックアップします。「キャリアデザイン A」担当の教員から受け取った日本語検定の結果を、顧問を通じて学生に返すときも、顧問が1人1人に「どうだった？」と声を掛け、フォローするそうです。

「大きなお世話にならないように、上手く間合いを計っています」

主体的な学生はどんどん主体的に学ぶ。一方で「背中を押す」と倒れる学生もいる。押すのではなく、タイミングを計って倒れないように支えてあげることで自分の足で主体的に、昨日より一段昇れるようにしたい、と先生。

一人一人に寄り添い、ケアをしながら独り立ちを支援し、eラーニングで学習する方式を、加藤先生は「コンシェルジュ方式」と呼びます。先生自らがコンシェルジュになり、例えば模擬テストなどで弱点を見つけたら、「こういうメニューで勉強したら良い」と伝えるなど、一人一人に合わせたコンテンツを提供したい、と先生。「ただし、情報リテラシーの関係で、すべての教員ができるようにはなっていない」と課題も教えていただきました。

教員への負担が大きいのではないかと、伺いました。

「確かに負担ではあります。でも、本学のミッションステートメントは『愛』と『奉仕』に生きる、ですから」と先生。きめの細かさは少人数教育ならではの付け加えます。

何が大切で、自分の感性は何に反応したのか。興味のアンテナを伸ばし、考える力を身につけることで、プレゼンテーション能力も向上するといいます。

学生生活で培った日本語能力は、就職活動でのSPI（就職試験で広く用いられている試験）やエントリーシート、自己PRなどにも役立っているとのこと。

2年間、密度濃く学習を積み重ねて来た学生は、意欲・実行力を身につけ、自信を持って卒業していきます。

教養と「想いを表現する力」を身につけ、自信を持って桜の聖母短期大学を巣立った学生たちが、今日も社会で広く活躍していることでしょう。



上村雅代(かみむら まさよ) プロフィール

ライター。1980年8月7日生まれ。芥川賞作家・荻野アンナ氏の助手として働きながら文章の研鑽を積む。『大震災 欲と仁義』荻野アンナとゲリラ隊(共同通信社)共著。現在、息子(4歳)の育児奮闘中。

芥川賞作家・荻野アンナさんの助手をつとめる傍ら、多くの作品をプロデュースし、最近では、人気アイドルグループNMB48のラジオ番組のシナリオを担当する等活躍中。